
置いていかれた者は、厄介ごとに巻き込まれる

ハタボー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

置いていかれた者は、厄介ごとに巻き込まれる

【Nコード】

N1280Z

【作者名】

ハタボー

【あらすじ】

あこがれの男を追ううちに何か終わっていた。
意気消沈していると、いつの間にか異世界を渡ることになる。
さてはて、どうなるのか。

オーフェンはともかく、とあるの方の原作は知っておいた方がいいです。

プロローグ その者目的地に辿り着いたはずだった（前書き）

一度書いたらタイトル入れてなくて失敗。
再び挑戦したためか内容が変わってる。

プロローグ その者目的地に辿り着いたはずだった

キリランシエロ、魔術士の名門と言っても良い牙の塔に置いて、チャイルドマン教室に籍を置き、鋼の後継や戦闘芸術品と呼ばれた少年。

謎の出奔を行い、追跡者を撒いている人物。

そして、あこがれであり、目標であり、標的である人物。

僕ことクリス・ブリードは、テーブルに肘を置いて、何気なく食堂内の人の動きを追いつながら回想する。

彼の出奔は突然であつた。

アザリー先輩が居なくなり、彼まで居なくなった。

あこがれのキリランシエロの出奔という出来事に落ち込んでいた僕に最高執行部から命令に下つたのは、出奔から実に一週間も後の事だった。

『キリランシエロの追跡。当人と接触し、帰還要請を行い。受け入れ無い場合の殺害。』

まだ十三歳になったばかりである僕に何故そのような命が下つたのかは分からないが、彼にあこがれていた事、チャイルドマンとの繋がりなどは知っていたのだろう。

殺す気などないし、殺すことなど無理だと知っていた。

だが、多少強引でも連れ戻すか、出奔の原因解決に尽力する気はあつた。

そして、彼の出奔から一週間と二日後、彼を追って牙の塔を出た。

大陸魔術士同盟から支援を受けやすいようなのか、上級魔術士のローブを貰って、意気揚々としていたのも数日までであつた。

彼の後を追う事三年間。

アレンハタムでは魔術士狩り？にあって吹き飛ばし、道中武装強盗にあって吹き飛ばした。

途中の山中では謎の女性に襲撃されて、戦闘の末吹き飛んだ。

また、別の町では黒髪で無能っぽい派遣警察の女性を吹き飛ばした。

小さな村では少女に絡まれた上、不親切極まりない村人達を吹き飛ばせずに林をこっそり吹き飛ばし、

追いつけないことに腹を立てて岩を吹き飛ばしたら、遺跡に吞まれて数日彷徨いつつ変な経験を得た。

そんな苦勞の果てに情報を得て、トトカンタまでやっとの思いで辿り着いたのである。

コンツ

木製のテーブルに固い物を置く音が目の前でしたため視線を下に向けると、美味しそうなグラタンが置かれていた。

思わずフォークを取って食事を始めようとするが、思考がそれを邪魔する。

目の前のグラタンで財布の軽さは二分の一になる計算になる。

どうせならおいしさを噛み締めて食べなければもったいない。

クリスは軽く頭を振って、これまでの苦勞やこれからの事の不安などを吹き飛ばし、久しぶりのごちそうに食らいついた。

そのあまりの食べっぷりに、マスターがご飯のお代わりを無料にしてくれたぐらいである。

「あゝ食べた食べた。」

結局お代わりを三杯もしてしまった。

膨れたお腹を擦っていると、入口から特徴的な黒色のローブが入ってくるのが見えた。

大陸魔術師同盟に似ている気もしないではないが、どこか違う印象を受けた。

ローブを着ていたのは、長い黒髪をポニーテールにした二十歳くらいの女性である。

その女性のパッチリ開いた目がクリスを捕えた。

「うわっ！」

視線がクリスの胸元に行き着いた瞬間、丸い目がもつとまん丸に見開かれた。

「マスター、いつものくださーい。」

知り合いらしいマスターに注文すると、女性はまっすぐクリスの元に近づいて来た。

自分の格好を咄嗟に確認した。

動きやすいジーンズにシャツを二枚着て、黒いジャケットを着ている非常に自然な格好のはずである。

胸元のドラゴンの紋章は知っている人は知っているが、普通のフアッションともいえるし不自然ではないはず。

近づいて来る女性を軽く警戒しながらも、会釈してくる女性に正面の椅子を手で進めた。

「ありがとう。」

どこか間延びした声で女性が返事を言って、正面の椅子に座った。

「えっと、それでなんですか？」

綺麗な女性、というより黒くない女性に耐性がほとんどないクリスは、警戒とは別の意味の緊張が高まるのを感じていた。

「それ、牙の塔のペンダントですよ。まずはそれを隠してください。」

「？」

何か分からないが、ジャケットのボタンを留めて中にペンダントを隠した。

「それでトトカンタに何のようであつたんですか？」

にこやかな笑みを浮かべつつ、独特な圧力を醸し出す女性。

ああ、この人は黒じゃなくて虹色の人なあ、と目の前の人を分析しながら、答えを考える。

「人を探しているんです。同じ牙の塔出身の魔術士を。」

途中から考えるのが面倒になって正直に答えることにした。
大陸魔術士同盟なら問題ないはずである。

「名前は？」

「キラランシェロ、今はオーフェンって名乗ってます。」

ザワツと食堂の空気が変わった。

「ま、魔王？」 「爆発男か。」 「穴が、穴がー！」 「お、落ち着け。」

「当番が来るのか。」「か、帰ってきたのか？」「無能と爆薬が・
・」「ま、待て、戦乱を潜り抜けた俺たちならできるはずだ。」
「待て、ここが拠点だったはず。」

頭に手を当てて叫びだす人や不穏な発言が飛び交う中、最後の一言が出た瞬間、宿屋全員の動きが凍りついた。

そして一瞬の間を置いて、客だけでなく店員も含めた全員が食堂から飛び出して行った。

「か、会長に連絡を！」「警官隊を出動待機だ！」「同盟にも通達を！」

外でも叫び声が響き始めた。

「な、なんだ？」

訳が分からないクリスに、女性とマスターが目を合わせて肩をすくめた。

「とりあえず、ここを出て私の職場まで来てください。」

「お代わり二杯分は払ってもらうぞ。」

どうやらお代わり無料なのは一杯だけになったらしい。

オーフェンの一言を出しただけでこんな事態になるなんて。

泣く泣くクリスは、財布を開いた。

これで、中身が無くならないことを願って。

プロローグ その者目的地に辿り着いたはずだった（後書き）

さてはてクリスは何を言われるのか。

1話 置いていかれた者（前書き）

オーフェンはもう居ません。

別大陸に行ってしまったています。

1話 置いていかれた者

「そ、そんなことが・・・」

「何も知らなかったんですかあ？」

クリスは、応接室で頭を抱えて項垂れた。

魔王オーフェンによるアイルマンカー結界の崩壊などを切っ掛けとした貴族連盟と大陸魔術士同盟の紛争であるキエサルヒマ紛争。そんな中で最前線となったトトカンタ市は、紛争終結後貴族連盟から離脱。

大陸魔術士同盟トトカンタ支部も戦力をほとんど送ってくれなかったこと、市街地戦になったのに勝手に貴族連盟と紛争終結を行った大陸魔術士同盟を忌み、独立してトトカンタ魔術士同盟となった。そんな経緯を話してもらったクリスは、あまりのことに混乱していた。

対する説明してくれ女性。

トトカンタ魔術同盟に所属しているラシィ・クルティと名乗った。も全然事情を知らないクリスを不思議そうに見ていた。

「それで、牙の塔を恨んでいる人もいます。」

「どこで時間が跳んだんだ？あの緑色のキノコを食べて気を失った時か？自爆した時？派遣警官を吹き飛ばして牢屋に入れられた時？」

ラシィの言葉など耳に入らないクリス。

それもそうだろう。

キラランシエロを追いかけて三年で、世間では八年程経っていたのだから。

「オーフェンさんなら、別大陸だと思いますよ。代表が言っていましたから。」

「ああ、そうだ。あの遺跡だ。あの遺跡のせいだ。なんかおかしいと思ったんだよ。あの後、町がボロボロだったり、暗い雰囲気が多かったから。じゃあ、なに？ 一日一年経ってたってこと？ 理不尽だ。ドラゴンでもできるのか？」

話を聞いていないクリスに、頬を膨らませたラシイは魔術を構成し始めた。

「蝙蝠の・・・」

目の前で構成される魔術に、クリスの体が勝手に反応した。防御魔術を構成しつつ、ナイフを取り出す。

「ラインダンス！」

「我抱きとめるじゃじゃ馬の舞！」

何も起こらなかった。

クリスの魔術によって魔術が中和されたからであるが、同時にクリスも我に返ってナイフを収めた。

「そ、それは・・・」

「すみません。ちゃんと聞きます。」

驚きを隠せないラシィを制して、クリスは謝った。

幸い部屋の外には知られていないらしく、誰も来ないことを確認する。

「では、説明しますね。」

落ち着いた所で、説明を受けるクリス。

牙の塔を恨みに思う人がいるトトカンタでは、牙の塔であることを示すドラゴンの紋章はできるだけ隠すこと。

探し人のオーフェンは魔王と呼ばれ、原大陸に行っているらしいことなどを聞いた。

だが、一番の驚きだったのは、ハーティアがここの魔術士同盟の代表をやっていることであった。

思わずクリスが、「あの不勝のナンパ師が!？」と叫んだくらいである。

ともかく、説明を受けたクリスは命令はもう無しかたと勝手に判断した。

だが、もっと衝撃はこれから来る。

一区切りついたと、判断したラシィは再び口を開いた。

「実はですね。大陸魔術士同盟によると、クリス・ブリードは死亡扱いになっているんですよ。ですから、あなたはモグリさんということになりますう。」

「はあ。」

間延びした口調を聞いたイラつきが衝撃を緩和する。

「はあっ!？」

わけがなかった。

「なんで、勝手に人殺してんだよ！」

「書類では、オーフェンの護衛をしていたクリスを貴族連盟の暗殺者が殺したことになると思いますね。紛争での正当性の一つとしてみたいです。」

開いた口が塞がらなかった。

確かに頻繁に連絡していたのが途絶すれば、除名か死亡扱いされてもおかしくないが、全く関係ない紛争に使われるとはひどい扱いだ。

「・・・お金どうしよう。」

始めに考えたことはお金のことだ。

この三年の追跡で一番困ったのは金銭であったため、体に染みついているのである。

「ほんと、モグリさんに似てますねえ。」

靴でも磨くか?と呟くクリスを見ながら、ラシィが呟いた。

「そのモグリさんって、キリランシェロ先輩、オーフェンさんのこと?」

「はい。モグリさんには困らせられましたあ。」

それから二時間程モグリさんの話を聞くことになった。
トトカンタ市の破壊活動、派遣警察やウェイトレス、執事との絡
みが一割、残り九割はラシイの愚痴であったが。
もちろんクリスのキリランシェロ先輩像が破壊されていたのは
言うまでもない。

話が終わったクリスはラシイの同盟加盟を一旦辞して、最初の食
堂に戻って一泊することにした。

宿屋、バグアップズ・インに泊まることにしたクリスは、二階の
一室でベットに寝転がった。

「何もかも終わった後って感じた。」

オーフェンのトトカンタにおけるドタバタ日常に西部から東部へ
の旅と結界解除。

そして、キエサルヒマ紛争。

自分の三年の内に全てが終わっていた。

「そしてあの時見た映像はその時のもの。僕は傍観者としても失格。
しかも死んでることになってるし。」

遺跡でクリスは、どこかの映像のようなものを高速で流している
のを見かけたが、少しだけ見て探索に戻ったのである。

そこでじっと見ていれば、傍観者という立場には立てていたかも
しれない。

遺跡に八つ当たりさえしなければ、キリランシエロ先輩を手助けできたかもしれない。

空しさだけが押し寄せて来た。

『じゃあ、あっちこっち行って見る？』

「誰!？」

どこからか、変な声が聞こえてきた。

ベットから身を起こして部屋を見回すが、壁に穴はなく、ベットの下にも誰も居ない。

『返事くらいしなさいよ。』

どこか拗ねた様な口調になった声だが、クリスにそんなこと気にしている余裕などない。

感覚を鋭敏にして声の出所を探るが、上のような左右のような変な感じである。

『まあいいわ。じゃあ、行ってらっしゃい。』

最後に見たのは、私物に手を伸ばす自分の腕だった。

1話 置いていかれた者（後書き）

オーフェンの世界を出ました。

次は定番といってもよい学園都市。

主人公、レベルアップできるかな？

2話 未来都市（前書き）

ちよつと主人公紹介

クリス・ブリード（現在15）

163センチ 52キログラム

見た目健康的であるが、意外としつかりした体である。
肩より少し長めの黒髪 黒目 ちよつと眉細め

キリランシェロのファン。

毎日観察して、魔術はほぼオーフェンと同じ発動呪文。

牙の塔では担当教師よりチャイルドマンを追っ掛け回し、そのしつこさからこっそり手合せして貰っていた。

見ているだけでマネできる辺り、魔術や体術の才能はある。

チャイルドマンからアザリー追撃の要請が来るも、実は寝ぼけていて覚えておらず不参加。

そして、最高執行部からの命でキリランシェロを追う。

2話 未来都市

目を覚ますとそこはどこかの部屋であった。

ベットは、安宿のようなあるかどうかすら分からないクッションではなく、今まで寝たこともないふかふかのクッション。

布団も青を基調にした格子状の白い線が入っているふかふかした布団。

もちろん枕もふかふかしていた。

「ふかふかー。」

そのまま寝たい欲望を抑え、枕を抱いたまま上半身を起こした。自分の服装はいつの間にかレモン色のパジャマになっていたが、まあ問題ない。

枕元の小さなテーブルの上には、材質不明の中身が透けている時計。計。

本棚には塔でしか見たことが無いほどの量の本が隙間なく詰まっております、机の上には筆記用具が散乱していた。

そして、ハンガーに掛かっている女物の制服。

「なんだこれ？」

時計の隣に二つの冊子が置いてあった。

タイトルは、『常盤台入学の手引』『ここにおける優遇とサービス』と『調査を上手くやる方法』

さっぱり意味が分からなかったが、ここに送った謎の人物の仕業だろう。

ここに関する事が何か乗っているかもしれないので、冊子一つを手を取った。

冊子には何か紙に挟んであり、それを見て目を輝かせた。

「これをこうやって、こう？」

台所のコンロの火をつける。

お腹が減ったため台所に来たクリスマスだったが、知らない機材がたくさんあった。

ここはクリスがいたキエサルヒマ大陸がある世界ではなく、科学がより進んでいる別世界だと挟んであったメモに記述されていた。部屋にある物や基本的な物の名称と使い方も書かれており、それを見ながら台所で調理していた。

「おお、こんなに簡単につけれるんだ。」

牙の塔時代にコンロを見たことがあるが、こんな小型で簡単に付けれるものではなかった。

どうやら本当に技術が発達した所に来たことは分かった。

コンロの他にも冷蔵庫や電子レンジ、炊飯器など知らない物がたくさんあった。

その一つ一つを確認しながら何を作ろうかと考える。

「食べ物……この箱、冷蔵庫か。今度は電気で動いている、と。電気？っと、まずは食事食事。簡単なものでいいか。」

どういう仕組みなのか調べようとする探究心を抑えて、朝食の

準備を始める。

まず、冷蔵庫からベーコンと何故か入っていたパンを取り出す。そして、火をつけたフライパンに容器に入った油をしいて、ベーコンを焼き始めた。

「飲み物も色々あるんだな。ここは良い場所だなあ。」

顔がにやけるのが止まらない。

キラランシエロを追い始めてから最初と最後以外は碌な物を食べた記憶がないクリスには、これだけでここに來た甲斐があった。

嬉しそうにパンをスライスして、ベーコンを待つ。

いい匂いがし始めたベーコンをパンに載せて、コップにオレンジを注いだ。

「よしっ！」

ニツと笑みを浮かべて、パンに齧り付き始めた。

灰色のブリーツスカートに半袖のブラウス、袖なしのサマーセーターを着たクリスは、部屋にあった大鏡の前に立った。

女子中学生としては平均より少し高めの身長、肩甲骨までストリートに伸ばした黒髪。

少し吊り目だが、愛嬌のある顔だと言えよう。

まったく胸は無いが、常盤台の制服は似合っていた。

このまま登校してもいいかなと、部屋を出た。

「どこの高級ホテルだよ。」

ここは寮らしいが牙の塔の女子寮とは大きく違っていた。

牙の塔は無機質な石造りの建物で、窓も多くなかった。

だが、ここは大きな窓が等間隔に並び、壁には絵も飾られており、高価な印象がする寮である。

少しの間絵を見ていたクリスは、ゆっくりもしていられないことを思い出し、部屋番号を覚えて廊下を歩きだした。

メモによると、今日は六月三日で常盤台中学という場所に転校する初日らしい。

寮は第七学区という場所にあり、バスで学舎の園の中にある常盤台に通う。

だが、今日は早めに行く必要があるとのことで車の迎えがくるようだ。

引き出しに入っていた腕時計を見ると、針が6…30を指していた。

武骨な代物で鉄ではない金属でできており、いざというとき手に嵌めれば？というメモが張り付けてあった。

常盤台の制服も戦闘の役に立つよう改造が施されてあった。

常盤台の生徒は普段でも制服着用を義務付けており、休みの日でも制服でいなければならないため助かる代物だった。

「なんか、地味に驚くことばかりだなあ。」

メモおかげで驚くより、感心することばかりである。

便利だけど新鮮味が薄くなってるなと思いつつ、寮の前に止まっているはずの車に乗るために廊下を進む。

「その女子、起床時間には早い・・・転校生か。」

「はい、今日からお世話になりますクリス・ブリードです。よろしくお願いします。」

廊下の向こうから急に話かけてきた寮監らしい女性に敬語で挨拶をしながら、自分で敬語を勝手に使ったことに驚いていた。

孤児だったクリスは、牙の塔に拾われてから問題児と一緒に部屋だったこともあり、敬語？なにそれおいしの？といった感じであった。

牙の塔での担当教師もその辺りが適当な人で、教師だからと言って無理に敬語を使わせようとしなかった。

彼が言った言葉は、「尊敬できるなら敬語を使え。」である。

一応、一通りの敬語はもちろん、様々な教養は身に付けている。

そんなクリスだから、演技もせずに初対面で自然と敬語を使ったことが驚きだった。

寮監は、三角の眼鏡ごしに鋭い視線をクリスに向けた。

「寮則については知っているか？上から君についてある程度 of 自由を許すよう連絡が来ているが、容赦するつもりはないぞ。連絡が無い場合、後からでも罰則は受けてもらう。」

「はい。」

「規則を守りつつ、学園生活を楽しめ。」

しっかり目を見ながら返事をする、寮監はふっと目を和らげた。

ポンツと肩を叩いて、去っていく寮監の姿を見ながら、母親とはこんな感じなのかと学園生活に寄せる期待を上げた。

「あ、時間。」

6..45に迎えが来ることを思い出して、少し足早に玄関に向かった。

車を見ると、大陸横断鉄道を思い出した。

あれも初めて見たときは驚いたものだ。

その時は、興奮して魔力の暴走で列車を故障させてしまい、担任から散々怒られた。

「本当にこれで動くんだ。燃料は何だろう。」

学園に着いて車から降りたクリスが呟いたのは、この言葉だった。運転手は、ハンドルやレバーを動かすだけでじっと座っているだけなのに車は勝手に動いている。

どうやら列車と同じように燃料を入れて、レバーを動かすと連動して車体を操作できる。

学園に着くまで車を見ていたが、燃料が見当たらなかったのである。

ここにおける建物の基本的スタンスは、キエサルヒマと同じような感じである。

ただ、窓やガラスが多く、レンガではない謎の材料を使っている。案内図を見ながら校長室を向かっている最中にそんなことを考察していた。

校長室に辿り着いたクリスがノックをすると、すぐに返事が返ってきた。

扉を開くと、奥に校長らしき男と手前のソファに長身の女性が座っている。

クリスの姿を見ると、女性が立ち上がって近寄って来た。

「クリス・ブリードさんですね。私は貴方の担当になる暮林といいます。」

「クリス・ブリードです。よろしくお願いします。」

「あなたは個別教室になっています。手続きは済んでいますので、早速始めましょう。では、校長先生失礼します。」

校長に一言も話させないまま暮林はクリスの手を引く。

トントン拍子に進む話についていけないクリスは、暮林に手を引かれて校長室を出た。

「ふう〜。」

肺に溜まった空気を全て出すかのように、深く息を吐いた。

暮林に連れられて、クリスは色々なことをやらされた。

まずは能力検査。

学園都市では魔術は嫌われているため、炎の能力者に見せかけると吉と最初のメモに書かれてあったため、炎の魔術を手加減しながら使った。

その結果はレベル3。

ぎりぎり常盤台に入れるレベルである。

非常に高い温度まで出せ、大まかな温度の調節や炎形状など操作もできるが、声を出す必要と短時間のみの発現から、レベル3止まりであった。

暮林はこんな者が個別教室になる理由が分からないと首を傾げていたようだが、体力測定には感嘆の声を上げていた。

クリスは体術も叩き込まれる牙の塔出身であり、旅を出始めてからも身体能力は上がり、能力を使わない場合の身体能力において常盤台どころか人間の最高ランクの身体能力を手に入れていた。

高校生と比べても余裕で勝てるレベルを叩き出すクリスに驚きつつ、能力には役に立たないこの分野ではねと落胆していた。

そして、最後の学力テスト。

ここでクリスの弱点が露呈した。

キエサルヒマにおいては博識である魔術士も、この学園都市においては小学生レベル以下の分野もある。

暮林は、薬の投与や機械による干渉を禁じられているこの不思議な生徒の能力アップの方法として、訓練よりまず学力など知識の向上を重点的にやることにした。

数日は自由にしていいわと言った後、小学校にも電話を入れていたため、今頃何から教えるかのカリキュラムを考え込んでいるのだ

ろう。

一方クリスは、学力調査などから知識量の不足を感じて検査結果が出るまでパソコンという物を使って色々調べていたが、教室を追い出されて学園を見学することにした。

しばらく見て回った後、時刻を見ると既に4…00を過ぎていた。魔術に体、頭の行使と流石に疲れていたが、どこか満足感を抱きつつのんびり歩く。

周りには、下校している生徒もちらほらおり、会話も時節拾っている、突然背中に何かがぶつかってきた。

強い衝撃にたたらを踏むが、転ばずに体制を立て直したクリスは後ろを振り向いた。

「ごめん。大丈夫だった？」

そこにはショートヘアをした茶髪の少女が心配そうに見つめてきていた。

2話 未来都市（後書き）

まずは定番かもしれない学園都市。

主人公にはレベルアップの下地を作ってもらいます。

更新間隔は、今の所二日に一回にしていくつもりです。

3話 主人公（前書き）

御坂さん登場

3話 主人公

彼女を一目見て、クリスは既視感を感じていた。

まるでどこかキラランシエロを初めて見た時のような憧れや眩しさ、少しの妬みを同時に感じたのだ。

「大丈夫？」

少女の声で我に返ると、肩までの短い茶髪の少女が、こちらを心配そうに見ていた。

同じ常盤台中学の制服を着て、ヘアピンだけのおしゃれが少女自体の魅力を引き出している。

「あたり、いえ、大丈夫です。」

「ごめんね。黒子を撒こうとして、前をよく見てなかったから。」

「こっちこそ、珍しいものばかりで注意散漫だったからお相子です。」

調査マニュアルに書かれていた対外用の丁寧語を使って応対する。少女は、首をわずかに傾げてクリスの顔をじっと見つめて来た。

「転校生？」

態度がおかしいと感じたわけではないことに内心安堵しながら、落ち着いて答えた。

「はい、今日から常盤台中学に入るクリス・ブリードです。」

「私は御坂美琴、よろしく。」

「お姉様ー。」

美琴の向こうから鈴のような声が聞こえた。

「あらお姉様、そちらのお方はどなたですか？」

「こちらは、クリス・ブリードさん。さっきぶつかって謝っていたの。」

「そうです。私は白井黒子。お姉様の露払いをやっておりますの。」

黒子は美琴より長めの茶髪を奇妙なツインテールにした美少女だった。

彼女はクリスを威嚇するような雰囲気醸し出しながら美琴の横に並んだ。

「初めまして、クリス・ブリードです。」

「今日から常盤台にいらしいの。今までどこに通っていたの？」

「え、えっと、外の中学で、学園都市自体初めてです。」

「じゃあ、学園都市案内しようか？」

「お願いします。」

「わ、私も行きますわ!どこぞとしれない猫と一緒にできませんわ。」

三人はまず学舎の園から回ることにした。

空を見上げると、新しい生活を祝うかのような青い空と空を飛ぶ船もどきが浮かんでいた。

3話 主人公（後書き）

今回は二人と知り合うだけです、短いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1280z/>

置いていかれた者は、厄介ごとに巻き込まれる

2011年12月13日01時02分発行